

注1 アール・ブリュット
正規の美術教育を受けていない人たちによる、なにものにもとらわれない自由な表現や作品。1945年、フランスの芸術家ジャン・デュビュッフェによって提唱された。フランス語でアール(Art)は「芸術」、ブリュット(Brut)は「生きのままであるようす」を意味する。

注2 アール・ブリュットコレクション
イスラエルにある美術館。アール・ブリュットの概念を提唱したジャン・デュビュッフェが蒐集した数千点ものアール・ブリュット作品とともに発足し、今日では1000人の作家による6万3000点以上の作品が収蔵されている。



ある方たちは就労を目指すことができません。先生はある時期から『みづのき』の寮生たちが独自の表現を活かして自立できるように、作品を売って収入を得る画家としての力をつけようとしていたんです。

1980年代の京展をはじめ、行動美術展、二科展などの公募展に作品が入賞したこととで寮生の評価が高まり、1993年に世田谷美術館で開催された世界のアール・ブリュット^{注1}の作品が一堂に集まつた『パラレル・ヴィジョン』展にも7点の作品を出展しました。その翌年、 스스로のアール・ブリュット・コレクション^{注2}に32点が永久収蔵されています。

のある方たちは就労を目指すことができません。先生はある時期から『みづのき』の寮生たちが独自の表現を活かして自立できるように、作品を売って収入を得る画家としての力をつけようとしていたんです。

ユートピアから地域社会へ

沼津：西垣先生が逝去された2000年頃は、障がいのある人たちにとつて福祉制度が大きく変化する時期でした。『みづのき』も次々と施設整備を含めた事業を進めますが、組織は変化に追われ疲弊している状況でした。私が『みづのき』の施設長になつたのはその頃です。

2006年には『障害者自立支援法^{注3}』

が施行され、コロニー構想に象徴されるユートピア「入所」から、地域に出ていく、地域で暮らす「通所」へと切り替わっています。福祉施設には地域生活を目指す支援事業が求められるようになります。

注3 障害者自立支援法
障がいの種類にかかわらず、自立支援の観点から一元的なサービス提供を規定した法律。人格と個性を尊重し安心して生活できる地域社会の実現に寄与することを目的としている。2013年『障害者総合支援法』に改題。

『みづのき』も事業の見直しをすることとなりました。高齢化し重度化する利用者を支える施設が、地域との繋がりを作っていくためにもアートプロジェクトが必要であると思いました。福祉事業を運営する者として、施設の暮らしの充実だけを考えるのではなく、社会の問題と向き合いながらアートという非常に重要な活動に取り組みたいと考えたのです。

みづのき美術館

奥山理子 | おくやま りこ みづのき美術館 キュレーター
沼津雅子 | ぬまづ まさこ 障害者支援施設 みづのき 施設長

京都府亀岡市



奥山理子さん(写真:左)、沼津雅子さん(写真:右)

沼津：1959年に『みづのき』の前身である、知的障がい者の救護施設『亀岡松花苑』が京都府亀岡市で設立されました。当時は雑木林に囲まれていました。

山出：障害者支援施設『みづのき』で表現活動の時間を設けるようになったきっかけをお聞かせください。

ーみづのき絵画教室の始まりー

創設者達は非常に美術に関心を持っていましたので、絵画教室は設立の5年後、日本画家の西垣壽一先生をお呼びして『楽しい絵の時間』として始まりました。当時は鶏小屋跡に、ムシロを敷いて始ましたそうです。

絵画教室が始まった1964年は東京オリンピックの年で、日本中がウキウキしていた頃でした。『みづのき寮(現みづのき)』には京都府下全域から支援が必要な方が入所します。なかには絵を全く描いたことがない方もいて、とりあえず紙とクレヨンに触れてもらうというところから始まりました。『楽しい絵の時間』は週に1回のベースで10年ほど継続しました。先生は寮生たちと親しくなつていくうちに、彼らには特異な色彩感覚や画面構成力があると感じるようになつたんです。そこで、選抜した寮生を対象に造形テストや色彩構成の課題など、本格的なトレーニングを行い、その表現を開花させていきました。

山出：重度の知的障がいのある寮生のみに指導を実施したのですか？

沼津：『みづのき』にいる重度の障がい



現在の絵画教室のようす



©Kim Sajik
西垣壽一時代の絵画教室のようす

奥山：施設長が話したような経緯から、『みづのき』は2007年からアートプロジェクトと共に農園活動を始めるようになります。私はこの時期からスタッフとして関わりました。利用者と畑作業を始めたとき、農家のおばあちゃんから「可哀想な子をたくさん世話して大変やね」と言われたことがあります。この人は一体何十年前のことと言っているんだろうって思うのと同時に、これが世間一般の反応なんだなっていうことも知りました。だけど、外に出て行くことで地域の人たちの理解が得られるということも実感しました。この経験が後の『みづのき美術館』の構想に繋がっていきます。



©DAICI ANO

—『みずのき美術館』の設立—

山出・福祉の制度が変わったから、「みづのき」も変わらざるを得なかつたんですね。2012年の『みづのき美術館』の開館は、その変化の一環だつたのでしょうか?

沼津・ええ。寮生の作品がアール・ブリュット・コレクションに永久収蔵されると「西垣先生が指導していたから、あれはアール・ブリュットではない」との批判も耳に入るようになりました。その意見がある最中に西垣先生は亡くなられました。だけどこれらの作品と、そこで描いてきたという事実は残っています。この40年間の歴史を残し、伝え続けてい常設できる場所を作りたいと思つたんです。

奥山・『みづのき美術館』は全国にアール・ブリュット美術館を創設するという日本財団^{注4}のプロジェクトのもとに開館されました。いわゆる保管・研究・展示を目的とした通常の美術館の運営ではなく、建てたときから町との繋がりを意

識していたので、アートプロジェクトを始めたのも自然な流れでした。

一方で、1万8000点にものぼる作品を、「夏に溶けた油が冬に固まる」と言われるほど高温多湿な屋根裏部屋に保存していたんですよ。今はできうるかぎり整備して、状態のいい収蔵庫を作つています。

山出・美術館をあの場所に選んだ理由はありますか?

奥山・亀岡市の方々からも物件に関する情報提供をいただき、最終的にこの元理髪店の空き家に決めました。本当はもっと大きい建物を探していたのですが、安はありましたが、亀岡の代表的な旧商店街で、駅から歩いて行ける魅力的な条件です。リノベーションをしてくださった建築家の乾久美子さんも「本当にこ

注4 日本財団
社会福祉・教育・文化などの事業を支援する公益財団法人。国内のアール・ブリュット作品の保存・管理や鑑賞機会の提供、普及に努める「アール・ブリュット支援事業」を展開する。その一環として、古民家や伝統的な建物を活かしたアール・ブリュット美術館の開館・運営を支援している。

奥山・年間3本から4本ぐらいの企画展を行つていて、『みづのき美術館』の所蔵作品展もあれば、プロのアーティストを交えた企画展も行つています。必ずしも障がいのある方々の表現ばかりを紹介しているわけではなく、アール・ブリュット以外のテーマの展示もします。それでも『みづのき』の作品が多く出展されていますね。

山出・奥山さんはもともとキュレーターの勉強をしていたなんですか?



小笠逸男 (1982年制作)



山崎 孝 (1982年制作)



堀田哲明 (1975年制作)

の小さな建物をリノベーションして美術館にするの?」って最初は驚かっていました。

開設するまでの準備に2年間かかりましたので、その間に町なかでアートプロジェクトを開館し、地域の方々ともじわじわ打ち解け、今では顔なじみになっています。

